

I 企画展「博士の愛した中国陶磁」記念講演会「東部ユーラシアの中の日本—文物の交流に見る」

講演2

東ユーラシア・東アジアと古代日本のモノ・人の交流

講師 鈴木 靖民*

みなさん、こんにちは。李成市先生が新羅についてたいへん興味深いお話をなさいました。正倉院の毛氈に貼られた布の「韓舎」という字と王宮というか皇太子の御殿があった雁鴨池で1970年代の初めに出土したものに書かれた文字が同一人物の筆跡だということは、私も気づきませんでした。これはすでに発表されているのですが、学界でも注目される研究の成果をお話いただきました。

はじめに

今回の中国陶磁の展示は、ほとんどが中国の中原を中心とするところ、それと江南のものが多いです。江南は揚子江の下流域のことです。浙江省、江西省、その南の福建省あたりの陶磁、つまり焼物が多いです。この展示に合わせた講演会なので私が最近関心を持っております東部ユーラシアと日本の古代がどのような関係があったのかについてお話ししたいと思います。

まず東ユーラシアについて、中国史の研究者にとっては、単純にユーラシアを東と西に分けて、「ユーラシア東部」、「東部ユーラシア」という言い方は普通になってきました。主に2010年代に入ってから、日本史研究者、対外関係の研究者から、言われるようになった学術用語です。

無難なところでは、大陸のほうはパミール高原から東、海のほうはマラッカ海峡です。西に抜けるにはマラッカ海峡を抜けないといけません。マラッカ海峡から東を指すことは、およそ問題ないと思

います。この10年、新しい資料の発見をきっかけにして、私も東ユーラシアは、インドとか西アジア、ペルシャも含んだほうがいいのではと考えるようになりました。インド、ペルシャはイラン高原の西のほうです。このようなところの場合によっては含めます。

シルクロードのタジキスタン、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタンなど、地元や日中韓、フランスなどの発掘調査をしているところです。サマルカンド、カラテペ、スイヤブなどご存知の方がいると思います。これらについて考えたほうが、東アジア、中国、朝鮮半島、日本列島の国や地域の人とつながっていくと私は考えています。

東ユーラシアに関係の深い言葉として、シルクロードがあります。シルクロードは道ということではなくて、シルクロード沿線の国々、人びと、あるいはそこで展開する広い意味での文化、こうしたものを含めてシルクロードと使ったほうがいい。時代としては、中国の南北朝から唐代あたりが最も盛んな時期ですが、この道というのは、いつの時代にもあるわけです。

2010年以降の東ユーラシアの議論として、東ユーラシア「世界」と付けるかどうかという問題があります。これについては研究者がさまざまな発言をしており、続いています。「○○世界」というと、そこに含まれる世界の普遍性とか規則性とか、少なくとも関係性、それから完結性が大事だと思います。共通性、統一性、同一性、アイデンティティ、そういうものをやはり通有していなければいけない。最低限、リズム、音楽のリズム、でたらめな雑音ではなくてリズムがあれば、それも「世界」かもしれないと思います。

もう一つ、市民の方はご存じと思いますが、近年グローバル・ヒストリーというものが流行していま

*Suzuki Yasutami 横浜市歴史博物館館長／國學院大學名誉教授

す。最近流行っている研究者に、ケネス・ボメランツというオーストラリアの人がいます。

また、日本でこうしたことを以前から考えられている方として、妹尾達彦先生という中央大学の中国史の先生がおられます。『グローバル・ヒストリー』という本を出版されています⁽¹⁾。妹尾先生は、ユーラシアだけではなく「アフロ・ユーラシア」——アフリカ大陸まで含めて一つの世界と考えます。学部生のとき、シルクロードを踏破したということがご自慢の方です。

もう一つ、中国史学界で20年ぐらい前から東アジア論が盛んです。それは中国の今日の領土問題が関係しているわけです。よく報じられるのは、中国の西のほうの少数民族——と言っても日本人から考えれば人口はすごい数ですが、新疆ウイグルとかチベット、中国東北部とかモンゴルなど、さまざまな問題を歴史から説明していこうということですが、その議論を摂取するとか批判する必要があります。それによって中国での歴史の学問が相対化される。一国史の相対化につながるとは思いますが、日本の歴史の学会は、中国の研究はほとんど無視です。ただし、これは中国に倣うとかいう意味では毛頭ありません。

それから大陸の中国は何と言っても、「一带一路」ということを2013年から国家の政策として打ち出しております。これは簡単に言うと、グローバルな秩序の改変を目指していると思われます。これは海と陸と両方です。中国から鉄道をヨーロッパまで通してしまうとか、海についても、マラッカ海峡は当然ですが、要所要所に中国が、長い間港を借りて開発して拠点にするなどしています。こうしたことを学問と連動させて、シルクロード研究ということで進めているわけです。

それから、シルクロードの世界遺産登録の問題があります。これは先ほどの「〇〇スタン」の国々や中国が関わってユネスコの世界遺産に登録されています。全部のシルクロードはたいへんなことですか

ら無理ですが、日本国も関わって、お金を出しているんですね。日本から見ると遠いところですが、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタンもおそらく調査しています。

今日ここにいるユーラシア文化館の竹田多麻子さんも発掘に参加されていますし、一昨年の秋には開港記念会館で講演会がありました。ルーブル美術館の発掘隊の隊長ロッコラントウさんの講演です。

そして日本、中国も西北大学などが発掘していますね。韓国も国立博物館などが中心になっています。それからフランスその他が発掘調査をしています。この成果が少しずつ公になってまいりました。たとえばカラテペからは、土でできたお寺の遺跡が出ています。日本では立正大学、帝京大学が調査しています。立正大学の昨年の発掘成果の報告が今月末、立正大学であります。

中国は西天山地域のお墓の発掘をしています。それからスィヤブからは都市の遺跡が発掘されています。先月、帝京大学の主催で国際シンポジウムが開かれました。日本各地からはもちろん諸外国の研究者も集まって、私も1日だけ出席しました。これは無視できないなと思いました。

それからすでに知られているソグド文書などの再検討が進んでいます。近年、中国の都の遺跡から見つかるソグド人墓誌の調査研究が進んでいます。福島恵さんとか、最近では中田美絵さんが、『歴史学研究』に研究動向を書いておられます⁽²⁾。三宅俊彦さんという考古学研究者も、これは時代が10世紀以降ですが、中国の宋銭の流通について東ユーラシア論をまとめておられます。私も昨年、日本大学の『史叢』に、講演を頼まれたものを元にして、昨年までの日本と中国の研究をまとめて書いたものがあります⁽³⁾。今日はその一部をお話したいと思います。

(1) 妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2018年

(2) 中田美絵「日本における唐代ソグド人研究の動向」『歴史学研究』980号、2019年2月。

(3) 鈴木靖民「講演 シルクロード・東ユーラシア世界の研究と古代日本」『史叢』98号、2018年3月。

1 シルクロードを東進したソグド人と宗教・文化

まず、シルクロードを東に進んだソグド人と、その宗教や文化についてです。

(1) 東アジアのソグド人、ペルシャ系ソグド人と宗教・文化

東アジアには、ソグド人や、ペルシャ系のソグド人が足跡を残しております。それは『日本書紀』、「元興寺縁起」に見えます。「元興寺縁起」は元興寺の塔の露盤に書いてあった銘を記録しており、6世紀末から7世紀初めのことを書いています。百済から倭、当時の日本に來た、お寺をつくったり仏さまをつくったりする技術者の肩書と名前が出ております。ここにペルシャ系ソグド人の仏教芸術の影響が見られるのではないかと思います。

具体例を挙げましたが、寺工の「太良未大」——「たらみた」と読むのでしょうか。露盤をつくる、つまり鉄や銅の鑄造の博士、技術者の「白味淳（はくまいじゅん）」、この名前について日本のペルシャ語やイラン語の研究者は、イラン語で名前が分析できるというのです。ようするに百済にペルシャ系の人、ペルシャ系ソグド人がいた。それが百済の王権・政權から日本に送られてきた。技術援助ですね。そういうことが考えられるのです。

では、百済以前はどうだったのか。証明できるのかということですが、海を挟んで百済の向かいにある山東省の青州の、6世紀の北齊のお墓の石板に彫ってある図とか、青州のお寺の跡からさまざまな仏像が出てきましたが、そこにある一つの絵などが手がかりになります。また、山東省の隣の山西省忻州の、時代がよくわかりませんが、北朝の九原崗のお墓の壁画にある「出行図」、つまり行列をしている絵などもあります。その「出行図」の中の一人の顔は、漢人、中国人や、北方の北朝を立てた人びとも少し違う風貌をしている。また、帽子や顔つきから、これもソグド人かペルシャ系の人ではないか

と考えられる人も描かれています。それから、馬は黒ではなく斑の馬ではないかと思われまゝす。斑馬は中央アジア、シルクロードの特産です。馬を売なのか、馬に何か交易品を積んで山東半島までやって來た交易図なのか。実際に中国の調査の報告では「交易図」と名前を付けております。

このように、山東半島まで胡人と呼ばれる西域の人が來ていたわけですね。その人は商人であって、固有の信仰があるのですが、仏教徒の場合もある。ということで、特にこういう人びとと仏教との関係を示していると思われまゝす。

朝鮮半島への仏教の布教について、朝鮮古代史の文献によると、百済には「胡僧」が出てきます。胡僧とは、シルクロードの研究で言うと、ソグド人などの僧です。「摩羅難陀(まらんなんだ)」という名前も、中央アジアの人名風の名前です。新羅にも、仏教は高句麗經由で墨胡子（ぼくこし）が伝えたと言われてまゝす。「墨」というのは、顔とか体の色です。「胡子」は「胡人」という意味です。そうすると、朝鮮半島の百済から黄海を挟んで對岸の山東半島、青州、太原、忻州——忻州は太原の北東隣で、ここまでは來るでしょう。そうすると、北のほうのルート、ロシアの「ステップ」と言われるあたりです。ちょっと強引にいくと、ステップと結ぶのではないだろうか。そうすると百済から南のほうはどうなるのか。南方のほうは南朝についても、否定するものではないと私は思ひまゝす。

それから研究者は「絹馬交易」と言ひまゝす。ようするに東の絹と西の馬を交易するということで、代表させた言い方です。こう考えていくと、東ユーラシアの経済とか文化あるいは宗教、こうした活動を通して、シルクロードを通して東にやって來て、いま触れたように、少なくとも朝鮮半島まで來たのではないか。もうひと踏ん張りすると、日本列島までやって來ることを考えたいのです。

その場合、国家とか公權力の政策的な関与、あるいは規定性があると考えたほうがいいのではないだ

ろうか。つまり人やモノの移動とか活動のベクトルは、交流ですが、西域からシルクロードを経て中国王朝へ入る。中国の王朝については、北朝中心に話しましたが、南のルートもあるのです。これらの中国王朝が中心になるわけですが、じつは西域の国々のなかにも、それぞれの中心がある。西のほうの中心の周辺の国や民族が、東の中心である中国に何かをもたらすとか、人が移動するとかいうことがある。あるいは東のほうでも、中心からその周辺になるところに代わる場合があるということが考えられるのです。

東アジアでは、何と言っても、中国王朝から朝鮮や倭、あるいは日本へ、つまり「中心から周辺へ」というベクトルが強く作用していることは認めなければいけないと思います。しかし、中心がものすごいものを何か持っているかということ、そうなのですけども、中心というのは周りがあつての中心です。そういう意味では、交流や相互の関係を考えなくてはいけないということを、今日のテーマの歴史事実からわかることから考えていいのではないかと思うのです。

ソグド人は、だいたい中央アジアのアフガニスタンの北部、トハリスタンというところが出自とされます。もっと言うと、ソグディアナです。ソグディアナは、サマルカンドを中心とするザラフシャン川の流域です。このあたりを中心に出てきた人たち、あるいはその子孫たちがソグド人だと、おおまかですが言えます。

そして、中国史の研究者などはペルシャのほうから移動してきたペルシャ系の人も含むようですし、近年ではソグド系突厥を含めることもあります。突厥は馴染みがないと思いますが、大雑把に言うと、現在のトルコ系の人びとです。ウイグルの人びとも、その意味ではトルコ系と言えます。

ソグド人の特性として、交易、宗教などが挙げられます。宗教は本来祇教、つまり拝火教です。拝火教ですが、もう一つゾロアスター教というのもあり

ます。それと先ほど申したように、資料的には仏教との関係もあります。軍事という特性もあって、武人の存在はひとところよく中国史の研究者が強調していたところですよ。外交、使者という特性も言われます。これは、言葉、ようするに多言語に秀でている。そのことはおそらく仏教の経典の翻訳とも関係があると思います。それと芸術とか芸能に優れていることです。

シルクロード、中央アジアを旅行した方はご存じでしょう。観光のアトラクションで、必ず踊りや歌を歌って楽しませてくれます。芸術は仏教芸術とも関係があります。お寺の内と外を飾るものです。こうした人たちは移動すると集住します。つまりコミュニティを形成することが多いです。少数派というのは集住します。さらに組織化されて、そのなかのコミュニティのリーダーは「薩宝」として中国の資料で出てきます。リーダー、チーフを表す漢字、表現です。

ソグド人などの外見上の特徴は、先ほども少し見ましたように、深目、目がくぼんでいて、鼻が高い。帽子をかぶっている。外套、つまり足元までくるむオーバーを着て、長靴、ブーツを履いている。だいたい皮製ですね。このようなものは、お墓に副葬されている陶俑や人の形をした陶器の焼物、それからお墓やお寺、石窟も含めての壁画、墳墓の石板—先ほどの山東のものがそうですが、石室の石板のレリーフなどに見られます。生活とか活動や信仰など、その葬られた人の生涯を偲ぶものであるわけです。

(2) 仏教と祇教の信仰

仏教のことに少し触れます。すでに触れましたが、仏教と祇教の関係があることは、北朝の太原の北齊のお墓に、これは祇教、拝火教の信者ですが、仏教の図像が見られることからわかります。こうした人が東へ進むと、山東のさまざまな絵画などに見られるものに続いてくるのだろーと思います。それから都のあった西安では、北周の「史」なにがしとい

う人のお墓の図像にも、仏教やヒンズー教の要素が見られるようです。唐代になると、西安の碑林博物館にあるお釈迦さんの仏像のなかに祇教の神の姿が認められる。碑林博物館では、741年の燃灯台の台石のレリーフに胡人、つまりソグド人などの楽器を弾いている図とか神獣画とか、ビザンチン系のデザインが見られます。これは北斉以来の宗教儀式で、燃灯の中に含まれることと関係がある。燃灯というと拝火教と結びつけがちですが、どうも仏教、道教、祇教、マニ教が混淆しているように思われます。これは順序としては、祇教から仏教に影響したものだと思われま

す。そしてやっと日本が出てきます。『日本書紀』を見ると、654年の12月の晦日。古代は晦日が6月と12月の年に2回あります。その12月の晦日のときに、難波宮の近くの味経宮というところで燃灯が行われ、読経が行われているという記事がありますので、こういうことも結びつくかもしれないと思います。

いずれにせよ、以上に述べてきたことについて、中国の研究者は「両教併重」と呼んでいます。祇教信仰に仏教信仰を摂取した、あるいは信仰の融合性や信仰の寛容性を読み取ることができそうです。

(3) ソグド人の仏教信仰

ソグド人の仏教信仰について、最近の研究ですと、たとえば旅順博物館にトルファン文書がありますが、そこに「康家一切経」というものがあります。それとトルファンで出土したという「康居士写経功德碑」、これは現物がなくて拓本しかないかもしれませんが、この資料を見ると、お経の名前がたくさん書いてあって、そこに則天文字が使われています。7世紀末から8世紀初めのもので、これは康という一族が「康」ですからサマルカンドを表すわけですが、仏教信仰を持っていたことを示すものです。これをどう考えるかです。

単純に考えると、仏教がインドから興って、北イ

ンドのほうから西のほうにシルクロードを通して伝わるのであれば、サマルカンドに伝わって信仰を持ったということになります。しかし資料に書いてあるように、漢訳仏教です。つまりサンスクリットを訳して中国文で書いてある。これは文化がどう伝わるかという問題です。

次は洛陽・長安の仏教についてです。これについても研究が進んで、たとえば洛陽のある坊の付近では、ソグド人の景教つまりキリスト教徒と仏教との交流がありました。それが9世紀初めのソグド人の墓誌を見るとわかる。それから、景教も仏教の真似をして経幢というものを立てますが、それを書いた人はソグド人の大徳です。大徳というのは仏教の高僧の肩書です。だからソグド人に仏教のお坊さんがいたと思われるのです。

次に、ソグド人の移民は軍事や政治にも関係していました。このことと仏教信仰とがどのようにつながるのかよくわかりませんが、たとえば訳経事業などが関係があるかと思われま

す。このように、中心と周辺という考え方をすると、中原などでの経典の翻訳、講義、その他、あるいはそれが流布することは、中心から周辺へも行く。そうすると、西域の敦煌、トルファンで見つかる漢文の写経の出土をどう考えるべきか。言ってしまうと、中国の都から、また西に戻った可能性があるのではないか。文化はどのように伝わるかという難しい問題の一つの例です。

(4) 倭（日本）に渡来した西域人

それでは、日本がどうなるのかということについて話さないと駄目です。7世紀半ばに、中央アジアの人が夫婦になってやって来ました。これは漂流だと思えます。唐に住んでいた人が、中心から周辺に來た例です。それから藤原京の木簡のなかに、西のほうの人を描いたのではないかという木簡があります。新羅の例だと、古墳から出てくる陶製の人形や、人物の石像があったり、王様クラスのお墓の参拝す

る道にある石像のお役人の容貌が、やはり西の人の容貌である。文献では、『唐大和上東征伝』によると、鑑真に随行してきた僧のなかに胡国人が含まれます。特に安如宝というのは、ブハラ、ウズベキスタンからやって来た人で、唐にいた人ですね。他にもさまざまな国の人がやって来ています。

遣唐使が天平の頃に連れてきた唐人の中に、波斯人の李密翳という人がいます。李姓はペルシャ人の唐風の姓です。波斯はペルシャのことです。それから8世紀中半ば、奈良の西大寺の古代の遺跡から出た墨書土器に、遣唐使と一緒に乗ってきた唐人の「皇甫東朝」という人がいます。これについてはユーラシア文化館の展示で5、6年前に展示されました。⁽⁴⁾

また、2016年に解説された奈良の都の式部省跡から出た木簡があります。これには西暦の765年にあたりますが、「大学寮員外大属破斯清通」と書いてあります。「破斯」ですからペルシャです。ここから何百メートルか離れたところで、異人の墨書戯画の顔を描いた木簡も見つかっています。わずかながら古代の東アジアの顔を思わせるものがありますが、ペルシャ人を日本にいた人が描いたものだと思います。これもネットで探すと見つかります。

2 唐・日本へ来たペルシャ人・ソグド人と文物

せっかくですから、この資料を使ってやりましょう。その木簡の右隣が、先ほど触れた西大寺の奈良時代の遺跡から見つかったイスラム陶器です(図1)。レジュメをご覧くださいとペルシャとイスラムを区別しておりますが、イスラムですからペルシャも関係なくはないわけです。左が復元したものです。このような大きな壺です。結構残っていますが、藍色、ブルーの色をしたものです。これが発掘され、一緒に出土した木簡も年号のある木簡があるので、だいたい時代が730年代だとわかるのです。



図1 西大寺旧境内イスラム陶器
奈良市埋蔵文化財調査センター所蔵

時代がごちゃ混ぜですが、法隆寺の救世観音像は少しわかりにくいですが、冠の真ん中の部分に三日月とか新月の模様があります。これはやはりイスラムの象徴です。だからこれも先ほどと同じで、中国で仏教に西のほうの宗教の影響を反映させた、取り入れたものです。これは古くて7世紀です。8世紀は正倉院の宝物で、麻布に菩薩、女性の絵を描いたものです(図2)。やはり頭のところに白く見えるのが月を表しているわけです。



図2 麻布菩薩像 正倉院宝物

その次は、前半の話と違ってざっくりとしますが、このようなものは都周辺の寺院だけにしか現れていないのかというと、そうわけことでもありません。

(4) 横浜ユーラシア文化館編『遣唐使は見た！憧れの国際都市 長安』(2013年)を参照。

これは鳥取県の上淀廃寺から見つかった7世紀後半のお寺の跡です。ここの壁画の破片の神将、つまり中心になる仏さんを守る人物ですね。これのもっといいものは、ご存じの法隆寺の本堂の壁画です。こういうものが7世紀後半には地方にも広まっている。もともとそうした壁画はシルクロードの石窟などにあるものです。

それから、奈良県の橿原市新沢千塚で、いまは博物館ができていますけれども、この千塚のガラス容器やお皿があります。これは6世紀ぐらいです。それから左下は、5世紀から6世紀、同じぐらいです、玄界灘の宗像・沖ノ島のガラス片です。たったこれしか見つかってないのですが、「土の中を足で蹴飛ばしたら出てきた」と、見つけられた乙益重隆先生という國學院の先輩の先生がおっしゃっていました。

その右、紺色のグラス、これは有名なものですが、正倉院の宝物で瑠璃杯（図3）です。



図3 瑠璃杯 正倉院宝物

このようなガラス製品は、まだ説が一定していません。ガラスの専門家でも見解が分かれております。ガラスで特に多いのはペルシャ系のガラスです。特にペルシャ系のガラスがどこから来たのか、どのようなルートを通ってきたのか。いくつものシルクロードを通して日本へやって来るわけですが、

おそらく朝鮮半島です。特にガラスなどが分布するのは新羅の都のあった慶州です。慶州でかなりの点数が見つかっています。

ガラス容器だけではなく、ガラスのビーズ、ガラス玉もあります。これについても先日あったシルクロードのシンポジウムの際に新しい報告がありましたが、ガラス玉10何点のうち、わずか4点か5点しか分析できないのです。その結論も、科学分析するのですが、ステップ・ロードを通して新羅に入ってきたのではないかと。つまり先ほど強調した北朝のほうを通ってくるルートですね。けれども、新羅に入るについては海のルートもある。そうすると文献から歴史を研究している学者だと、どうなっているのかよくわからないという結論で、まだまだ研究の途中だと思うのです。

なお沖ノ島のペルシャ系のカットグラスについても、やはり海路で来たという説を楢山林継先生という世界遺産に関わった先生が述べておられますが、弓場紀知さんという焼物の専門家はステップ・ロードから来たかと述べられていて、説が違うわけです。途中をつなぐような遺跡も少しずつ発見されて、特に中国の研究成果で紹介されております。

少し韓国の研究の報告を挙げますが、私たちが研究している文献で、わずかに例があります。平安中期の仲算というお坊さんが書いた『妙法華経釈文』に「鵠」というものが出てきます。鵠という鳥は何なのかわかりません。鵠は、おそらく鳥が「コウ」と鳴くのだと思います。恵雲という僧が持ってきたという説ですが、これは天竺、インドから——インドとペルシャは違いますが、ペルシャの国の人の船に乗って新羅に招来した。それを新羅の使いが日本に貢上した。そして日本の寺々にそれを収めて養わせる。この鵠は大安寺に入ります。大安寺というのは外国のものが入ってくるセンターなのです。そうということが示されておりますので、これは唐との貿易で、しかもペルシャの船に乗って、マラッカ海峡を越えてやってきたんでしょうかね。ペルシャ物の

買得ということを示して、それがさらに中継されて日本に入ってきたということがわかります。

先ほど李先生が紹介された新羅は、中継貿易の商品がけっこう多いのです。特に南のほうのものはそうです。こうした海のシルクロードを示す例であります。そうしたことをフォローするような成果もタイなどで見つかっています。このように、不十分ですが、ガラス容器などを中心とする西域の文物の伝来については、海と陸の複数の交流の道があるという結論になるのです。

日本について、遣唐使には玉生、鍛生、鑄生、細工生がともなって技術などの習得をすることになっています。このなかにガラスを習う人がいたのではとひそかに思っています。最後に、少しでも焼物に触れないと、また叱られそうです。一番下の変なこわそう顔、これは正倉院の宝物になっている伎楽、仮面劇のお面(図4)で、そのなかの「酔胡」——酔っ



図4 伎楽面酔胡王正倉院宝物

ぱらった胡、つまりソグド人の王様という意味です。これについても最近の研究者は、これが薩宝にあたるのではないかなんて言うのです。もう一つお面があって、それは「酔胡従」と言います。「従」というのは「従者」、それを象徴した仮面劇だと推定しているのです。その上に、胡人がラクダに乗った俑があります。これは西安の陝西博物館のもので、顔がなんとなくソグド人に見えます。

焼物の話をしなければいけないのですが、焼物の本格的な研究は1970年代にならないと、きちんとしたものなかったようです。

簡単に言うと、7世紀後半に緑釉がつくられます。つくられるというか、入ってきたのです。奈良の飛鳥の川原寺の埴土のか焼物なのかの破片。大阪の古墳の石棺の台の破片。こうしたものは少ないです。これは朝鮮の緑釉の系譜です。最近の研究だと、朝鮮でも特に百済です。緑釉の系譜、技術を元にもう少し色の多い、多彩な釉のかかった焼物の生産へと広まっています。そして8世紀になると唐三彩が舶載される。三色使った高級な焼物がもたらされます。9世紀になると単彩の緑釉の生産になる。こういう流れがあるということを、田中琢さんという奈良文化財研究所の先生が指摘されています。この研究は1979年のものですが、驚いたことには2014年の上野博物館の図録を見ると、基本的に同じなのです。田中先生はすごいと思います。

日本の遺跡で中国舶載陶磁が出土した遺跡をまとめますと、私が見られたのは1990年代の初め頃までの資料ですからずいぶん前ですが、ざっとご覧ください。沖ノ島、鴻臚館の遺跡、大宰府跡、筑後国府跡から始まって、お寺が多いです。それと奈良の都が多いです。または大宰府などどれも公的な施設、役所です。

みなさんは横浜や神奈川の方が多いでしょうから関東や東北のことに触れますが、静岡城山遺跡、神奈川では平塚の四宮下郷。ここからは政所とか、曹司という古代の役所、国府——佐賀に残っていますが、それを表す墨書土器が見つかっています。これが見つかったとき、私は新聞にコメントをさせられたのです。まだ若かったです。

東京の落川遺跡は、平安から鎌倉にかけての遺跡です。横浜では都筑区の西ノ谷という遺跡からも出土しています。ただし、器種がわかりません。わからないというのは、破片ばかりですけども57点あって、2、3日前に報告書を見たのですが、入って

います。これは国家の管理が弱くなった時代の豪族の屋敷の遺跡です。それから千葉、栃木、宮城県の高賀城跡は陸奥の国府です。岩手県の胆沢城も同じです。北のほうに少し進んでいく。後田遺跡も出羽の国府の關係の遺跡です。それから秋田城からも出土しています。このように、中国の高級な三彩が出土しています。

ということで、どうして10世紀以降に日本各地に広まったのかというと、中国の唐から宋の商人が、江南のほうなどから船に積んで、しかも国家の管理のもと、国家が指導しながら、それから日本に上陸しても、国家の大宰府の指導管理で交易をする。対価は、先ほどのお話にもあったように、絹綿、絹です。綿花はまだ流行らないというか、おそらくまだ栽培されていないです。銀を加えていいかどうか。北方の、本州の東北北部、北海道、これは平安の貴族、その支配者たちと交流がありますから、可能性としてはあります。摂関家・藤原氏なども北方の交易と關係を持っています。板材はクエスチョンマークです。これは中世になっていくと、日本からの輸出品として出てきます。日本の板材は建築材などにすごくいいわけです。こうしたものが可能性としてあります。これは宋代です。このようなことが考えられます。

そして繰り返しますが、日本では役所や公的なお寺、あるいは私立の大きなお寺などが時代が経っていくと各地の領主クラスの有力者層が受領する。中国でもそれに応えるような背景があって、中国江南で経済活動が盛んになります。それが外に出るということで、それを仲介するような商人、あるいは「ミドルマン」と呼ばれるような人たちがいたということが大きな前提になるわけです。

おわりに

これまで話してきたことをふまえて、箇条書にまとめます。(1)東ユーラシアの中の古代日本:モノ、人、文化の密接な關係があり、東ユーラシアのレベ

ルでは、ベクトルが西から東へ一方的に向かうことです。もちろん中国から西への拡大もあります。(2)中国北朝～隋唐の多文化・多民族構造:東ユーラシアの交流の中心となり、ソグド人、ペルシャ人の文化要素を包摂して、コスモポリタニズムを現します。(3)古代日本と東ユーラシア:東ユーラシアと日本の關係を中国・朝鮮が介在します。遣唐使や同行した人びとの果たした役割やペルシャ人の来住が日本支配層の国際性をつちかったといえます。

ご清聴ありがとうございました。

横浜ユーラシア文化館 第8号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019

ISSN 2187-7734